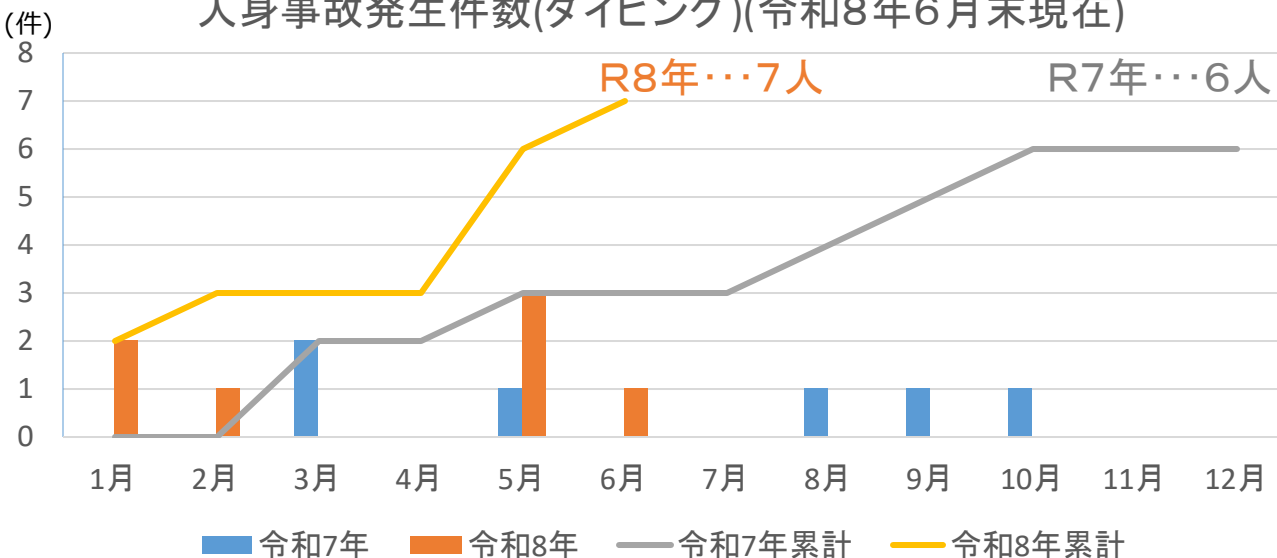
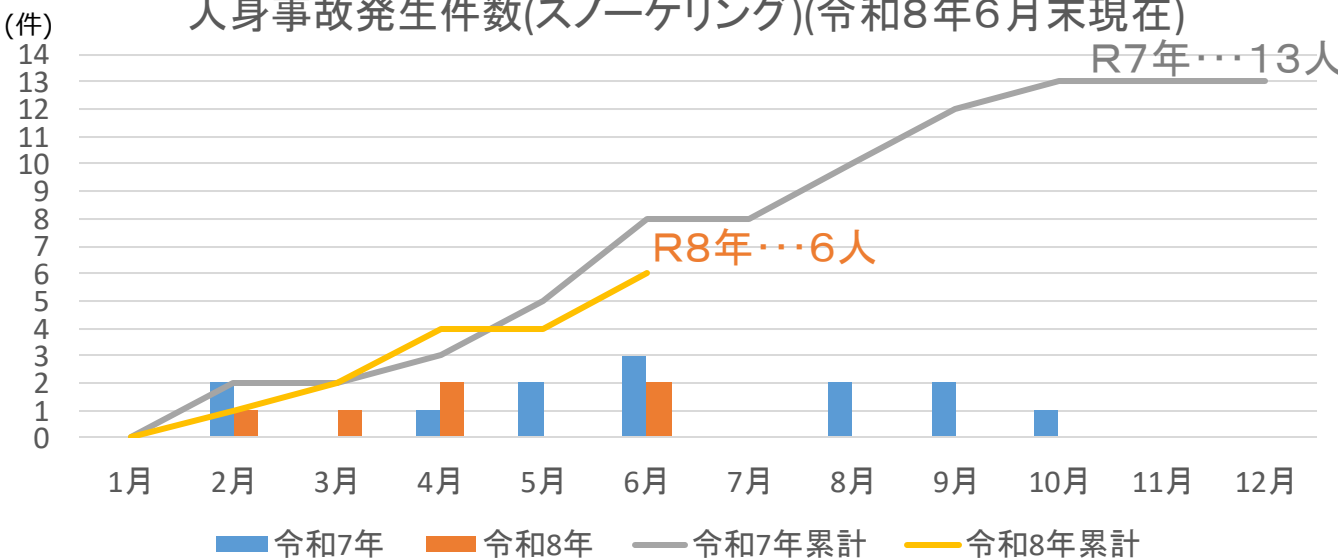


人身事故発生件数(ダイビング)(令和8年6月末現在)



人身事故発生件数(スノーケリング)(令和8年6月末現在)



* 管轄区域：5市11町村
 那覇市、豊見城市、糸満市、浦添市、
 宜野湾市、嘉手納町、北谷町、南風原町、
 八重瀬町、久米島町、恩納村、読谷村、
 渡名喜村、粟国村、座間味村、渡嘉敷村

ダイビング・スノーケリングの死亡事故(令和8年4月～6月)



那覇海上保安部交通課

時期	活動内容	場所	事故者	被害	経緯
4月	スノーケリング	読谷村都屋漁港付近	50代 男性 日本人観光客	死亡	事故者は、社員旅行で沖縄を訪れ、読谷村都屋漁港沖の海上において、海中いけす内を泳ぐジンベエザメを観るために、スノーケリングを開始。事故者は海面に顔をつける際、スノーケルを口から離すなど取扱いになれていないことから、スノーケルを使用せず、海面に顔を付けて見学を行っていた。海中で魚に餌をあげていたスタッフがうつ伏せ状態で浮いている事故者を認め、肩を掴んで顔を上げたところ、意識がない状態であった。スタッフが船上に事故者を引揚げ、心肺蘇生を行いながら都屋漁港へ入港。病院へ搬送されるも、死亡が確認された。
5月	ダイビング	渡嘉敷村沖	60代 女性 日本人観光客	死亡	事故者は、0948頃から、他の客を含め、3名で2本目のダイビングを開始。1012頃、水深12メートルでガイドらと共に、浮上を開始し、浮上中の1014頃事故者の足が海中に沈み脱力しているところをガイドが確認。救助し、渡嘉敷村の診療所に搬送されたが、死亡が確認された。
6月	スノーケリング	糸満市大度海岸	40代 男性 県内在住者	死亡	事故者を含む友人5人はスノーケリング目的で大渡海岸を訪れ、1名を除く4人でスノーケリングを開始。入水後しばらくして全員が潮の流れにより沖へと流された。同4人は各々岸へと向かって必死に泳ぎ、3名は海岸付近までたどり着いたが、事故者が見当たらなかったことから、付近にいた者に救助を依頼した。その後、県警ヘリにより発見、消防等により陸に引き上げられ、病院に搬送されたが、死亡が確認された。

「ウェットスーツだけでは、命は守れない」ライフジャケットの着用を！

○どれくらい違う？

一般的なウェットスーツは、厚さにもよりますが数kg程度の浮力を生むことがあります。一方、ライフジャケットは製品によっても異なりますが、成人用では10kg以上の浮力を持つものが一般的です。

○浮き方は？

ウェットスーツは身体全体の浮力を増やしますが、基本的に「仰向けになれば自然に顔が水面上に出る」という設計ではありません。

ライフジャケットは、救命用として設計されたもので、頭部を水面上に保ち、意識を失った場合でも呼吸を確保しやすくすることが目的です。

	ライフジャケット	ウェットスーツ
主な目的	浮く、溺れにくくする	保温・体温低下を防ぐ
浮力	大きい	小～中程度
浮力の材料	発泡材など	ネオプレン生地＋内部の気泡
装着時	身体を水面上に持ち上げやすい	身体が浮きやすくなる程度
泳げない人の安全確保	非常に重要	代用できない



● 溺水のメカニズム

ヒトの体の比重は、状態によって1より大きくなったり、小さくなったりします。平均で見れば吸気では0.98程度、呼気で1.03程度です。したがって空気を吸い込んでいれば真水に浮くし、吐けば沈むことになります。

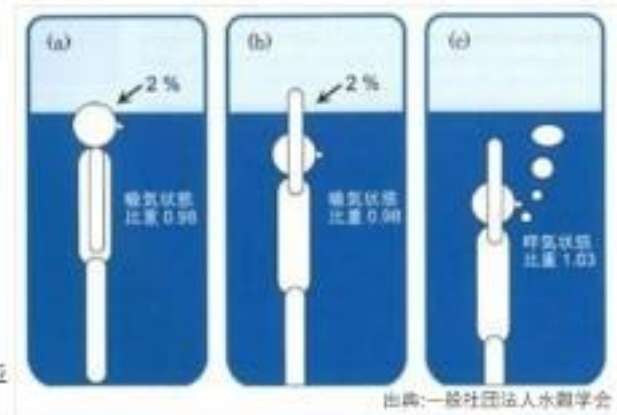
上半身には肺があるため比重が軽く、下半身は筋肉のために重くなっています。そのため気をつきの姿勢で水平に水面で浮こうとしても足が沈みます。しばらくすると垂直の姿勢になり、(a)のように空気を吸い込んでいれば体の98%が沈んで2%が水面上に出ます。

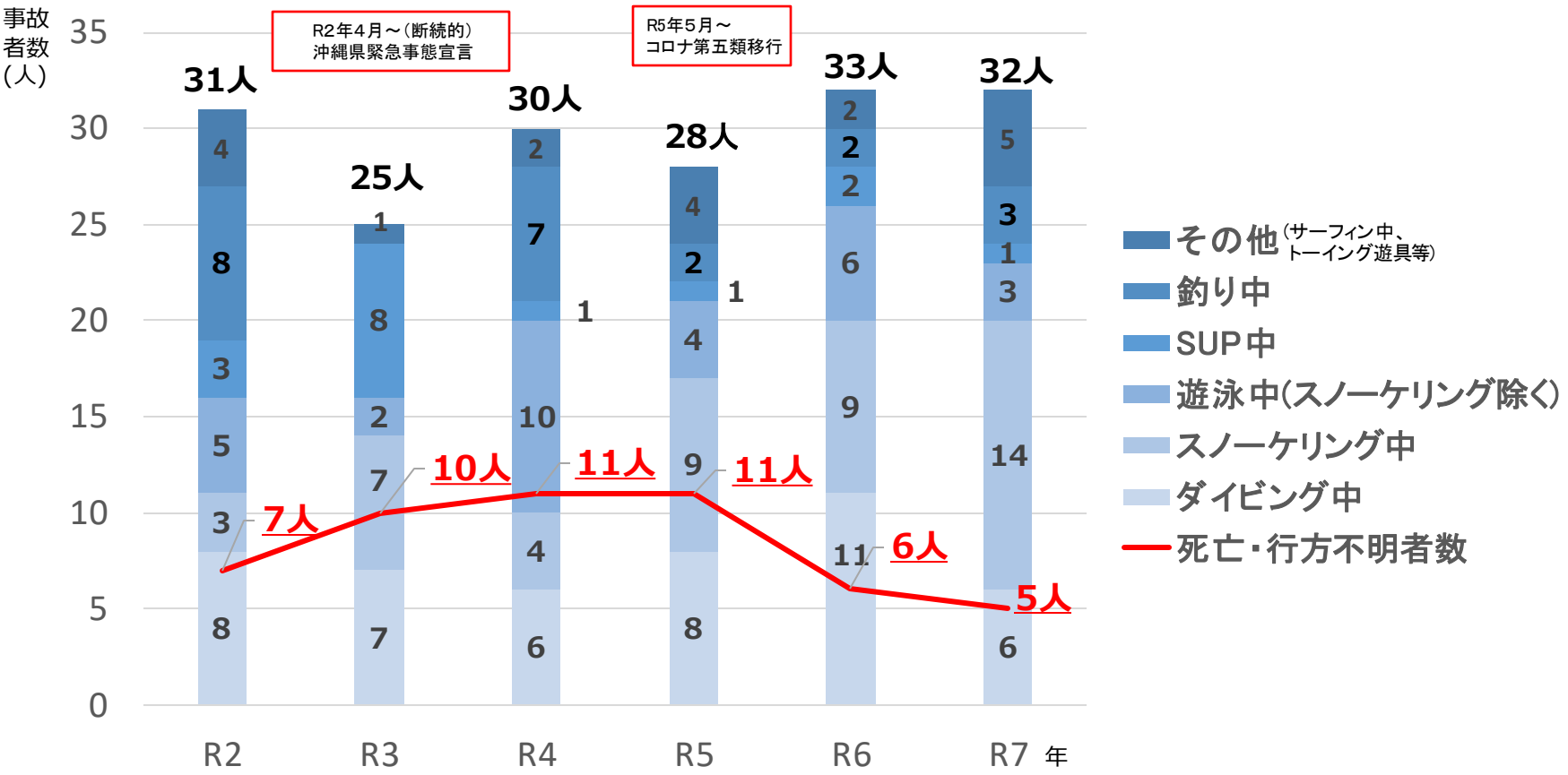
(b)のように溺者が助けを呼ぶために手を挙げると、腕が水面上に出すことのできる2%を担ってしまうのでその分だけ体は沈みます。さらに(c)のように「助けて」と声を出せば肺の空気がなくなり比重は1を超えて、ますます沈みます。つまり溺者が静かに沈むというのは、体を垂直にして、手を挙げて、声を出して助けを呼ぼうとしたときに起こる現象なのです。

● 淡水では、肺に空気が入っている場合で体の約2%（海水では5%）しか浮きません。

▶ 海や川では、波や流れの影響によって十分に顔を水面上に出すことができず、呼吸が困難になる場合があるため注意が必要です。

▶ 十分な浮力がない場合に声を出したり、手を振って助けを呼ぼうとすると、溺れてしまうこともあります。





管内の特性

- マリンレジャーに伴う人身事故総数 R7年32人 ※R6年比1人減
うち死亡者数 R7年5人 ※R6年比1人減(那覇部発足以来最小)
- ダイビング中、スノーケリング中の事故の割合が高い
- R7年死亡者5名のうち4名が慶良間諸島でのスノーケリング中に亡くなっている

活動別（括弧内は死亡者数）	事故者数	うち県外 （県外・海外移住者）
● スノーケリング	14 (5)	12 (5)
● ダイビング	6	6
● 遊泳（スノーケリング除く）	3	2
● トーイング遊具	3	2
○ その他 （釣り、サーフィン、SUP、海上遊具）	6	2
合計	32 (5)	24 (5)

※地図上大きい丸は死亡事案

